

Rekisi103. 歴史研究は科学か知的娯楽か

清正研究は、熊本で盛んであり、熊本でしか研究されていないと言っても過言ではないかもしれません。最近の熊本での清正研究の特徴として、以前の伝記的な清正像から、清正の実像を描く研究に変化しているように思います。それは、水野勝之・福田正秀氏の共同研究である「加藤清正妻子の研究」および「続加藤清正妻子の研究」（以下「妻子の研究」）が発表されたことが大きいと思います。水野氏は、清正の正妻清浄院の実家である水野宗家20代目に当たり、加藤家ばかりでなく水野家、榊原家、阿部家など清正の妻子の関係先の菩提寺や墓を訪れては、過去帳や墓石などをひっくり返し、新しい史料や事実を引き出しています。そして、史料の解説については、歴史研究の長い福田氏が正確な解説をされたことから、清正の妻子の歴史が詳らかになり、これまで言われてきたことと異なる清正の実像が浮き彫りになっています。この研究の特徴は、フィールドワークにあると思われます。研究の対象となる関係者の関係先を実際に訪れて、自分の目で確認することの重要性を再確認させられます。そしてもう一つは、水野氏の工学系のシステム思考があるのではないかと思います。システムには、全体の統合性が求められるので、歴史の断片的事実を繋ぎ合わせ、統合仮説を設定し、その仮説を立証するような史実を探すという指向があるように思います。ビジネスでよく使われる事実→仮説設定→検証の手順です。これまでの歴史研究は、史料の解説が主な方法であり、当然史料が残る分野だけが研究対象でした。従って、清正のような生存期間が短く史料もほとんど存在しない人物は、大学や国立の研究機関の研究者の研究テーマにはなりませんでした。これまで清正について書かれている記述は、秀吉や家康など史料がたくさん存在する人物の研究者がついでに書き表したものがほとんどです。お二人の研究は、清正のような史料の少ない人物についても、このようなやり方を用いれば立派な研究書が出来上がるというモデルになったのではないかと思います。

お二人の「妻子の研究」が2007年と2012年に出版された結果、それ以前の清正に関する学術書の記述は、間違いが多く参考にならなくなっています。そして、それ以降の清正に関する学術書においては、多くが「妻子の研究」から引用されています。「妻子の研究」は現在清正研究で最も信頼できる研究書になっていると思います。

しかし、それでも地元熊本においては、旧来の俗説を引用し、誤った清正像を発信し続けています。例えば、妻子の研究では、清正は朝鮮から帰国後、秀吉から家康に乗り換えており、徳川家の有力な姻戚大名になっていたとし、「昭君之間」は秀頼を迎えるための部屋ではないと判断していますが、熊本では、観光案内などで相変わらず「昭君之間は秀頼を迎えるための部屋」という説に拠っているようです。清正公は、死ぬまで豊臣恩顧の大名であったことにしておきたいようです。熊本城を巨大なテーマパークと考えれば、その方がドラマチックで集客効果もあり都合が良いのでしょう。そして、地元の歴史家によって検証された判断を、「ローカル判断」と見なし、採用していないように思えます。「妻子の研究」に書かれた内容は、現在清正に関する最高レベルの研究成果であり、デファクトスタンダードです。

水野氏もそうですが、最近歴史研究（検証）に理科系や工学系（以下理系と表記する）の出身者が参入し、歴史の通説に反証を加える例が増えています。理系出身者にとっては、文系歴史学者や研究者の密度の低い根拠に基づく歴史認定に我慢がならないのだと思います。文系でも法曹関係者は、厳格な事実認定の技術を有しているのですが、彼らは歴史検証の分野にはほとんど参入していません。それは、検証するには史料が余りに少ないこと、および多くの歴史の問題は、「どころんでも実害がない」、即ち訴訟で言えば「訴えの利益がない」、裁判の対象にならない問題だからです。

そう考えると、一般の歴史の研究（検証）は、一部の人の知的娯楽のようにも思えます。確かに調べていくと暗い闇が開けていくようで楽しいのですが、それだけで、友人に話そうものなら「それがどうしたの」と嫌がられます。

最近の新聞に、大学や高校の歴史研究者から、中学や高校で教える歴史上の偉人の名前などの知識を1600くらい減らし、狭い範囲でよいからもっと探求するような学習法に変えるべきという提言があったようです。賛成です。私も受験のため歴史上の人物の名前や出来事、年代などをたくさん覚えましたが、社会に出てほとんど役に立っていません。私も学校では、テーマを絞り、歴史を学ぶ・掘り下げる方法を身に付けさせることが重要だと思います。大学の研究者がやるような手法を学ばせます。そうすれば、興味を持った歴史の対象を自ら掘り下げることができるようになります。歴史の問題は、ある意味藪の中だから、今流布されていることが正しいとは限りません。今のような教科書に書かれていることを暗記するやり方では、思想操作に使われる可能性が出てきます。何が正しいかは自分が判断する姿勢を身に付けさせることが重要です。

また、歴史書は深い概念の宝庫であり、国語教育においても有益だと思います。今の当用漢字には含まれていない漢字や言葉がたくさん含まれ、調べるだけでも国語の深い理解に繋がります。また、テーマを定め、自分で調べ、レポートを提出させる、発表させることは、国語教育の内容でもあります。従って、国語と日本史は、一体で教えると良いと思われれます。国語の教師は、日本史の教師も兼務する体制が考えられます。